

令和2年4月7日

■分類

キジ目 キジ科 ライチョウ属 学名：*Lagopus muta japonica*

■現状

1. 分布及び個体数

- 日本のライチョウは、北半球北部に広く生息する種ライチョウ (*Lagopus muta*) の中で、分布の最南端に隔離分布する亜種。
- 高山帯に隔離分布しており、現在の分布域は頸城山塊、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山、南アルプス。
- 1980年代には約3,000羽と推定されたが、2000年代には2,000羽弱に減少したと推定されている（信州大学）。

2. 形態及び生態学的特性

- 成熟個体で全長約37cm。
- 体羽上面の羽は年3回換羽し、冬羽は尾羽を除き全身白色、繁殖羽は雄は黒、雌は茶褐色の斑模様となる。秋には雌雄ともに灰褐色になり、外見による区別が難しくなる。
- 雌は6月にハイマツの枝の下などの地上に窪みを作って巣とし、6卵ほどを産卵する。
- 主な食物は高山植物の芽、種子など植物質。産卵前の時期や成長中の雛は昆虫類も食べる。
- 遺伝子解析により、南アルプスと御嶽山以北の集団の大きく2つの遺伝的集団に分かれる。ただし、御嶽山以北の集団も遺伝的に均質なわけではなく、頸城山塊の集団は北アルプス南部や乗鞍岳、御嶽山などと距離の遠い集団とは若干違いがあることがわかっている。

3. 好適な生息地

- 主に本州中部の標高2,200-2,400m以上の高山帯（ハイマツ林帯や岩石帯）で繁殖し、冬季には森林限界付近まで降りて生活している。

4. 生息を脅かす要因

- 捕食者となり得る種の分布拡大による影響（キツネ、テン、カラス等）
- 従来生息していなかった種（ニホンジカ、ニホンザル等）が侵入し、高山植生が採食されることによる生息環境の劣化
- 山岳環境の汚染に起因する感染症の原因菌等の侵入
- 登山客等の増加に伴う攪乱
- 気候変動による営巣環境・植生等への影響

■保護の取り組み

- 種の保存法に基づく国内希少野生動植物種（平成5年）。保護増殖事業計画策定（24年）。第一期保護増殖事業実施計画策定（26年）。
- 国指定の特別天然記念物（大正12年）。
- 生息地の多くが国立公園（上信越高原国立公園、中部山岳国立公園、南アルプス国立公園）や鳥獣保護区（北アルプス鳥獣保護区）に指定。
- 長野県希少野生動植物保護条例に基づく指定希少野生動植物（平成16年）
- 生息域外保全に関連し、国内の動物園9施設において、別亜種スバルバルライチョウによる飼育・繁殖の知見の集積が行われている。
- 実施計画に基づき、平成27、28年に乗鞍岳で計22卵の採卵を行い、上野動物園、富山市ファミリーパーク及び市立大町山岳博物館にてファウンダーの飼育を開始した。平成31年3月から一般向けの公開展示を開始。現在、新たに飼育を開始したいしかわ動物園、那須どうぶつ王国、横浜市繁殖センター（非公開）を合わせた計6園館全体で42羽が飼育されている（令和元年）。
- 減少が著しい南アルプス白根三山地域の北岳において、ケージ内保護方法を平成27年から実施、平成29年度にはキツネ及びテンの捕獲を行う捕食者対策事業を実施している。その効果により、平成27年の9なわばりが、令和元年には35なわばりに増加し、生息数が4倍に回復している（令和元年）。
- 火打山にてこの30年ほどでのイネ科等植物やミヤマハンノキ等の低木林の繁茂による急激な環境変化が確認され、平成28年から行っているイネ科等植物の除去試験から高山植物等の回復効果が見られ、令和2年度から山頂直下及びライチョウ平で環境改善事業としてイネ科植物の除去を実施する予定。
- 平成30年7月に絶滅地域の中央アルプス木曾駒ヶ岳で約50年ぶりに雌ライチョウ1羽が確認され、遺伝子解析から北アルプス又は乗鞍岳から飛来したことが判明した。令和元年には野生復帰技術確立に資する試験として、乗鞍岳から採取した有精卵を移植し、孵化まで成

功した。令和2年度には飼育卵による野生復帰及び3家族20羽を乗鞍岳から移殖することで、自立個体群の創出を目指す予定。